

(1) 岸劔神社の大神楽

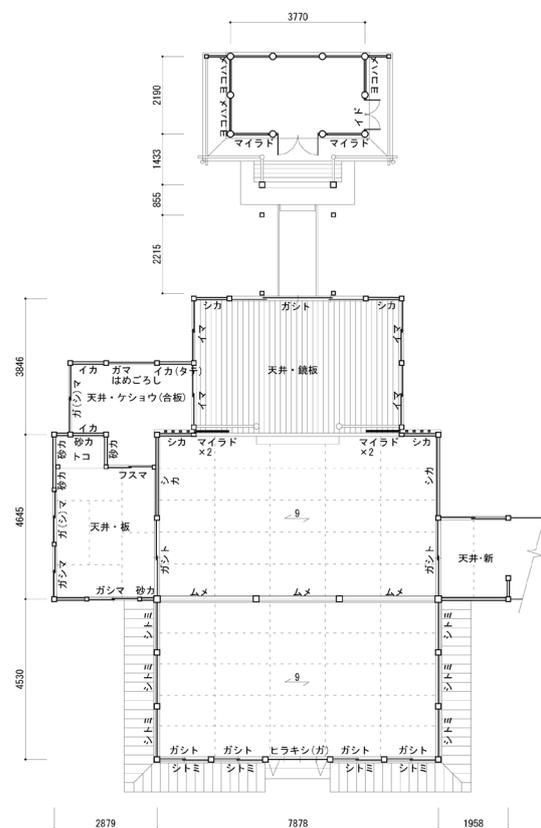
岸劔神社の由来は伝承によると、気良村の字鳥居で連日の干ばつが続いた際、神主が雨乞いをしたが霊験なく、村の氏神の御神体である宝劔を取り出して二間手村境の河岸で洗ったところ、にわかには雲が湧きおこり、雨が振り出し、川水が増水して劔を押し流した。数日後、八幡城下の吉田川岸（現在の宮ヶ瀬橋のあたり）の岩間（かかり岩）に劔がかかっているのを清水彦右門がを見つけ持ち帰った。当時、郡上城主であった遠藤慶隆がこれを聞き、慶長19年（1614）宮ヶ瀬橋近くに本殿を建立したとされている。「寛文年間當八幡絵図」【1-4-24】では、宮ヶ瀬橋近くの岩山に同社が祀られていることがわかる。

近代になると、城郭が取り壊された城山の中腹に、明治19年（1886）に移転した（現在の社殿の南側）。大正8年の北町の大火では社殿は焼失しなかったが、昭和17年（1942）、城山公園造設に伴い、現在地に移転している。

現在の境内には本殿、幣殿、拝殿と並び、その向かって右側に長生殿、その奥に井戸と土蔵が建つ。鳥居の外側に氏子が管理する小社が三社ある【2-3-4】。本殿は三間社流造で覆屋があり、建設年代は昭和17年以前である。拝殿は拝殿は桁行5間、梁間5間、一重、入母屋造、平入、棧瓦葺で南面しており、背側面に附属屋を附す。内部梁間5間のうち正面3間を外陣、奥の2間を内陣とし、昭和17年のものと思われる。幣殿は間取りによれば昭和40年代の建築である。



2-3-4 岸劔神社 配置図



2-3-5 岸劔神社 本殿・拝殿平面図



2-3-6 岸劔神社 本殿



2-3-7 岸劔神社 拝殿

岸劔神社の大神楽の由来は、寛文5年（1665）遠藤常友の発願により、岸劔宮の神主清水尾張守京都神祇官江神らが神楽伝授を願い、翌年正月、尾崎、向山、洞、中坪、職人町、鍛冶屋町より選抜された青年が上京し、吉田神道秘蔵の神秘曲を習い、毎月1日、15日に練習を重ねてその年の9月20、21日の両日に初上演を行った伝えられている。このとき伝授された「神乗秋月」「神車」は秘曲とされ、他地区へ伝授することは禁止されていたという。

その後の文献を見ると、嘉永年間の『濃北一覽』の御鋤祭の項に、享和元年（1801）「両町方神楽獅子舞殿町御家老様」の記述がある。両町とは北町南町のことをさすとすると、北町は岸劔神社、南町は日吉神社の神楽と考えられる。また、文化8年（1811）「神楽順路留」には、「神楽かさりも同人方ニ而凡七十餘年も到来候」とあり、文化8年の70年前とすると、寛保元年（1741）より以前から神楽があったと推測できる。

近代になると、明治5年太政官令により新町と橋本町は岸劔神社氏子となった。「岸劔神社大神楽採譜帳」によると、明治19年頃（1886）、本町で神楽の保存維持が困難となり、尾崎（中坪）に譲渡したことがあり、その後は尾崎（中坪）の神楽と呼ばれていた。昭和30年以降は、本町の有志がこれを復活させ、北町神楽というようになったという。昭和30年に岸劔神社大神楽奉賛会が設立され、下部団体に伝承部（芸能部）を設けている。

試楽や本楽の日程は、明治5年までは旧暦3月14日意匠付、3月15～16日が祭礼で、明治25年までは9月20～21日、明治26年以降は4月20～21日となり、昭和52年から4月第3土日となっている。

奉納される大神楽は、神楽舞が、「上獅子」「雌獅子」「雄獅子」の3曲、渡御曲が、「舞鶴（俗称こすずめ）」「山越」「十二神楽」「花車（俗称ちゃぶろ）」「秋月（俗称おかざき）」「神乗秋月（俗称かんじおかざき）」「神車（しんぐるま）」の7曲がある。「神乗秋月」「神車」は秘曲であり、とくに「神車」は、21日夜、打上げの行列が、宮ヶ瀬橋上を渡るときに演奏されるしきたりとなっている。



2-3-6 岸劔神社の大神楽（境内）

神楽の行列は、昭和48年県無形民俗文化財指定の調書【2-3-7】によれば、合計76名で、唐子、さらさら摺り、附太鼓打、鼓打は子供が奉仕する役である。神楽の道具としては、神楽堂、太鼓、笹鉦などがあり、かつては辻ごとに人形を飾ったという。

現在の順路は、平成5年(1993)「岸子劔人神社祭礼大神楽順路表」【2-3-8】や、平成22年度の試楽・本楽順路【2-3-17、18】をみると、大神楽が練り歩く町並みは前節で示したような、城下町を起源とする町家が密集して建つ町並みであり、郡上市郡上八幡北町伝統的建造物群保存地区内に岸劔神社が位置し、試楽で通る柳町、職人町、鍛冶屋町【2-3-9】や、試楽・本楽ともに通る大手町が、伝統的建造物群保存地区にある。

特に本町の平野酒店が重要な場所で、試楽のお練が行われる場所であり、また本楽の打ち出し宿でもある【2-3-10】。平野酒店は宮ヶ瀬橋を北町へ渡り、橋詰の三叉路に面している。平野酒店は、本町の通りに東面し、本町と肴町の道筋が交差する広小路になっている。この敷地と小駄良川との間に敷地があり、通りに面して主屋、作業場を縦、主屋の奥には坪庭を設け、新座敷を置く。作業場の南側には隠居、茶室があり、道具蔵、酒蔵などが配置されている。主屋は、大正末期の建築で、桁行7間2尺、梁間行5間、木造2階建、切妻造平入、棧瓦葺である。2階の全面に格子がはめられ、大屋根の下には両側に袖壁が設けられている。

岸劔神社の大神楽の最大の見せ場は、本楽道行における宮ヶ瀬橋の「渡御」である【2-3-11】。南町から岸劔神社に帰る際に宮ヶ瀬橋を渡る神輿が、旧社地である「かかり岩」付近を通過する際、そこを去り難い神意を促し、神楽がそれに同調して神意を鎮め給うという神事である。奉賛会への聞取りによれば、「渡御」の神事に移る際は、まず秘曲「神乗秋月」が奉され、宮ヶ瀬橋のたもとに神楽が入ると秘曲「神車」に入る。笛頭は神楽の足が入る瞬間に「神

2-3-7 岸劔神社の大神楽 役内訳

大世話方 (2)	神子 (2)	市兵衛 (1)
露払 (2)	唐子 (2)	おかめ (1)
鼻高 (1)	さらさら摺り (1)	床机持ち (4)
出の花 (3)	附太鼓打 (1)	東西 (大幣持 1)
幟 (2)	鼓打 (10)	獅子 (4~6)
笠鉦 (2)	田楽持 (1)	警護 (20)
神太鼓 (2)	太鼓堂 (1)	
猿田彦 (1)	笛吹 (10)	

2-3-8 「岸子劔人神社祭礼大神楽順路表」
平成5年(1993)

試楽	立石家⇒下尾崎⇒上尾崎⇒中坪三区⇒大乘寺橋(小休憩)⇒職人町⇒鍛冶屋町⇒大手町⇒長生殿(昼食、唐子交代)⇒岸劔人神社神事⇒中殿町⇒上殿町⇒中坪四区⇒新中坪団地⇒中坪五区⇒四区公民館(小休憩)⇒初音一区⇒上柳町⇒浄因寺(夕食)⇒中柳町⇒下柳町⇒肴町⇒本町(お練り平野酒店前)⇒橋本町(熊崎宅)
本楽	橋本町(経由)⇒本町⇒大手町(経由)⇒下殿町⇒下柳町(神農薬師前、小休憩)⇒下桜町⇒桜町公民館(昼食、唐子交代)⇒上桜町⇒八幡大橋⇒東町⇒上愛宕町⇒中愛宕町⇒下愛宕町⇒川原町⇒立町⇒日吉神社⇒願連寺(休憩)⇒役場前(奉賛合同祭礼)⇒中央通り⇒橋本町⇒日吉町⇒橋本広次様宅(夕食)⇒新町⇒宮ヶ瀬橋(渡御)⇒本町⇒大手町⇒長生殿



2-3-9 岸劔神社の大神楽(鍛冶屋町)



2-3-10 本町 平野酒店(左)前

車」に入れるように列を調節しながら進む。橋の上で40分くらい神事を行い、橋を渡って降りたら一気に岸剣神社まで早足で駆け上る。神社までは石段であるため担いで上がる。このように、岸剣神社の大神楽の順路において、宮ヶ瀬橋は重要な場面を演じる地点である。宮ヶ瀬橋は、「寛文年間當八幡絵図」【1-4-24】にも記されており、現在の橋梁は昭和12年に架け替えられた鉄筋コンクリート製である【2-3-12】。

以上のような建造物や町並みには、祭りが始まるころには設えが施される。献燈の提灯が各家の軒先や通りに架けられ、多くの家々の正面に、鯨幕が張られて、祭りの雰囲気町中から感じられた。このような設えは、昭和初期も現在にもみることができる【2-3-13～16】。



2-3-11 岸剣神社の大神楽（宮ヶ瀬橋）



2-3-12 宮ヶ瀬橋



2-3-13 現在の設え（柳町 提灯）



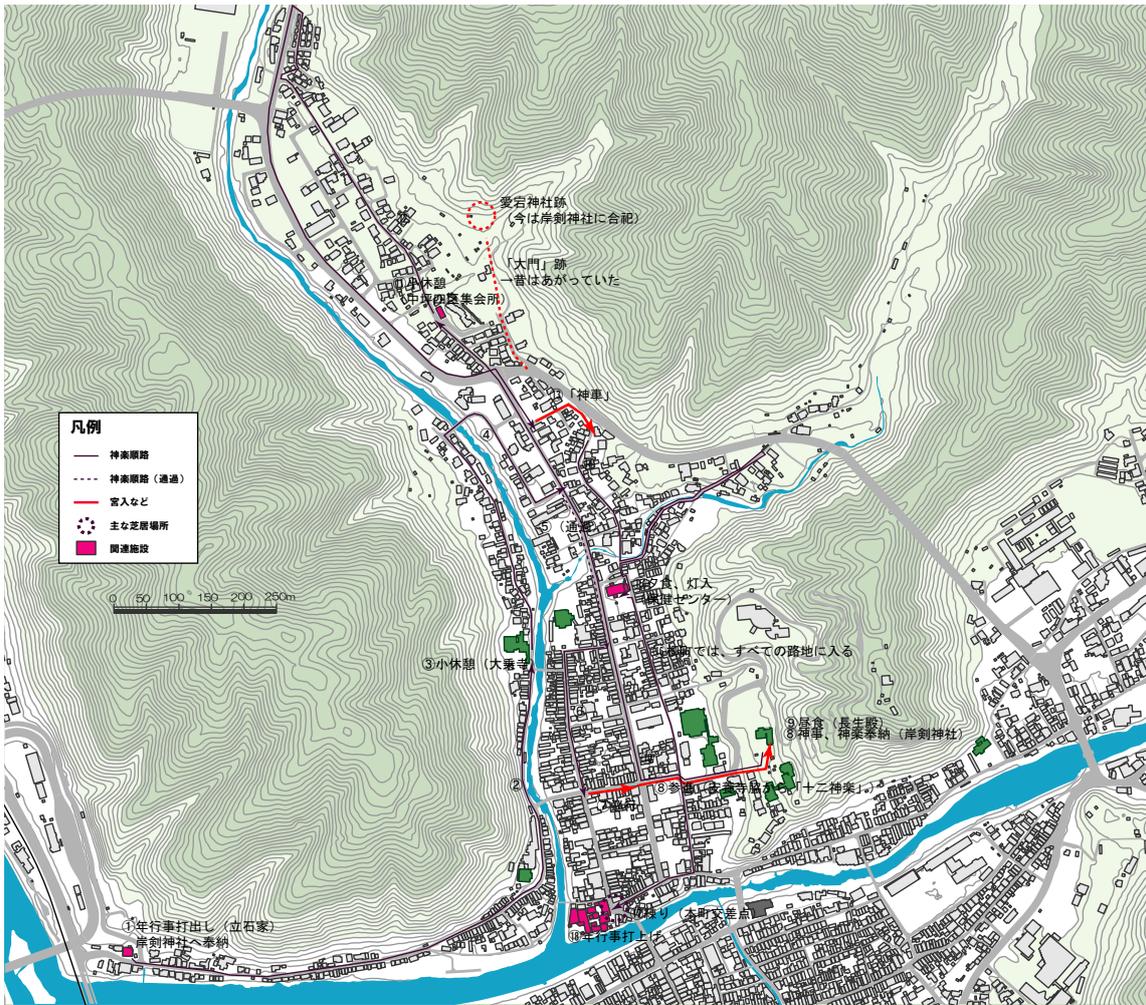
2-3-14 軒先の提灯



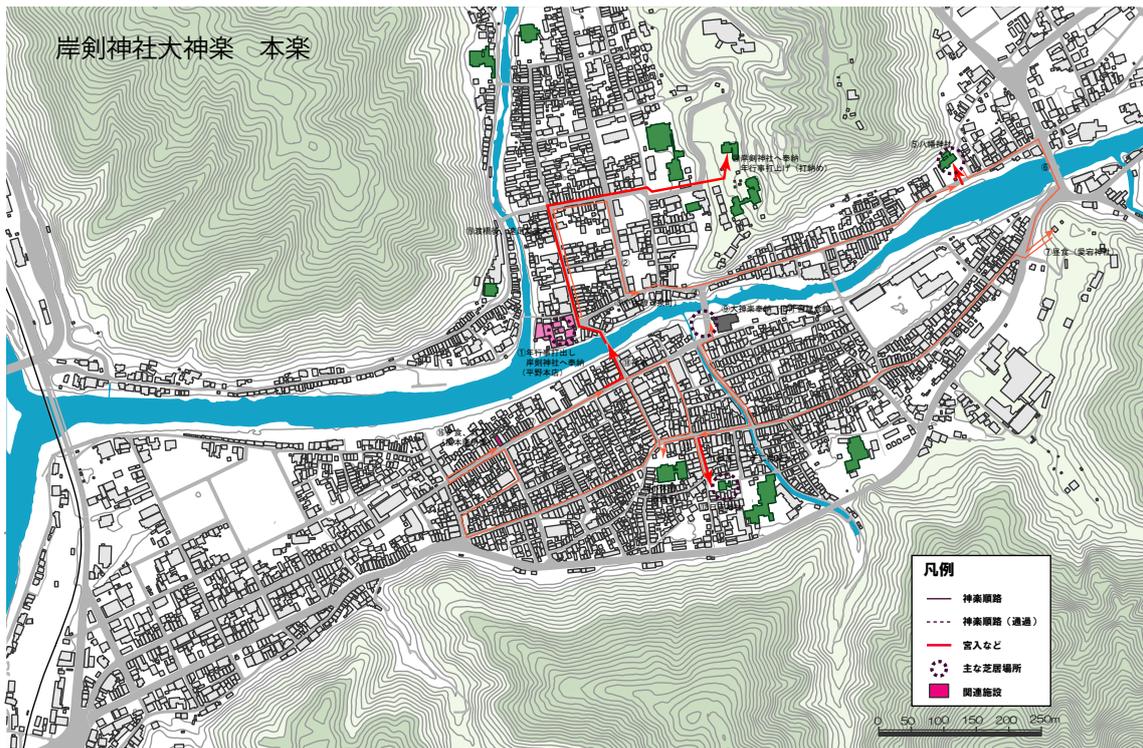
2-3-15 昭和初期の設え（提灯、幕）



2-3-16 昭和初期の設え（殿町 幕）



2-3-17 岸剣神社の大神楽 試案順路 (平成 22 年度)



2-3-18 岸剣神社の大神楽 本案順路 (平成 22 年度)

(2) 日吉神社大神楽

南町に位置する日吉神社の創建は、遠藤慶隆が元龜2年（1571）にこの地方にあった、原野の中央の小さな社に武運の隆盛を祈り、天正年間（1573～1591）に安久田村から山王を合祀し、八幡城下の吉田川以南の守護神として境内を定め、大宮山王と名付けられた。当社は日枝社と呼ばれていたが、日吉社とよばれるようになる。文化8年の記録によると、寛保年間には神楽は行われていたとある。

明治5年までは旧暦3月14日が衣装付、15日と16日が祭礼で、同25年までは祭礼は9月20～21日であった。明治26年からは4月20～21日となり、昭和51年まで行われていた。昭和52年から4月第3土日に行われている。

南町の城下を東西に通る立町と、その南に位置する日吉神社をつなぐ「大門（だいもん）」と呼ばれる通り沿いには、町家や共同井戸なども残っている。「寛文年間當八幡絵図」【1-4-24】では、吉田川の南側に「立丁」とあり、通りの北側に「御足軽仲間」、南側にも「御仲間」とあり、通りから南に折れると「若宮」とある。大門の入り口には大正12年に建てられた石柱が建つ【2-3-19、20】。御渡曲の「こすずめ」は、この大門でのみ演奏される。

境内に入ると、鳥居、宮ヶ瀬橋にかつてあった大灯籠（文政4年）があり、門は西側の山本町側に設けている。門の正面に拝殿と幣殿、左手に参集殿、拝殿の奥に覆屋を設けて本殿があり、本殿の両脇に秋葉と稲荷の小社が配置されている【2-3-21】。

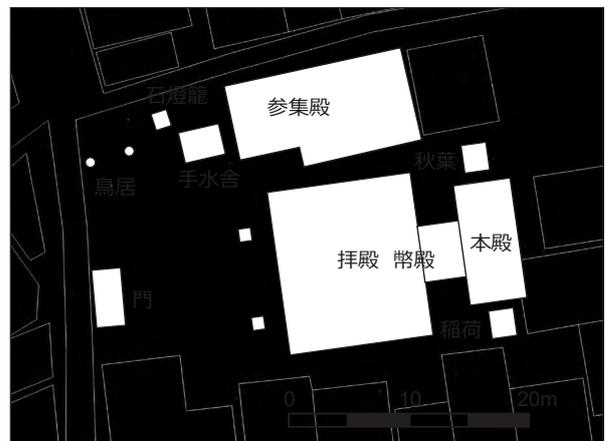
本殿は、3間社流造で、『郡上八幡町史』によると、天保年間（1830～1843）に改築されている【2-3-22】。拝殿と幣殿は昭和42年に焼失したため、同44年再建された【2-3-23】。



2-3-19 日吉神社 大門 大正12年



2-3-20 日吉神社 大門の設え



2-3-21 日吉神社 境内図

日吉神社大神楽の神楽舞は、上獅子、牡獅子、牝獅子で、渡御曲は、十二神楽、岡崎（帰りの曲）、岡崎くずし、ちやぶろい、こすずめである。役と行列の順は【2-3-24】に示す。

この大神楽の特徴は、獅子が高く舞うところにある。また、こすずめは大門での宮入りのみで演奏する曲である。渡御曲は、曲がり角で曲を変えており、ところどころで芝居を打つと、歓声上がる。

近世の記録から、大神楽の順路は、文化8年(1811)「神楽順路留」にみることができる。また、文政8年(1825)「殿様御在所ニ付神楽献上役割」では、藩主が在城の際、神楽を奉納したことが記されており、北町で家老や郡代の前、惣門橋、大乘寺入口などで打たれた様子がわかる。文久2年(1862)「永代用神楽打上帳」では、3月14日が衣装付、3月15日に久五郎宅前にて神楽を打始め、宮迄打ち、拝殿前で神楽をあげ直し、当時の嶋方の左京、豎町、川原町、名廣（乙姫町、山本町）、中藪（北朝日町、常盤町）など東部を廻り、宮ヶ瀬橋を渡り、岸劔神社に向かう。また南町へ戻り、新町、稲荷町井山、大坂町などを回りながら宮へ戻る。16日には本楽を打始め、豎町、左京、橋本町、今町、榊形、新町、大坂町など西部を廻り、宮にて打つ様子が記されている。

昭和34年「日吉神社例祭大神楽奏楽道順」【2-3-25】では、衣装付が上日出町で、試楽は日出町から始まり、南町の西部を廻り、新橋を渡り北町へ、本楽では、日吉神社から始まり、南町の東部から中央部を廻る順路となっていた。

平成22年度の順路【2-3-29、30】をみると、午前7時から年行事打出し宿（中央コミュニティセンター）から、笛の音とともに始まり、日吉神社へ向かう。日吉神社で試楽を打ち始め大神楽を奉納する。日吉神社を出て、東の愛宕神社へ向かい、大神楽を奉納する。八幡大橋を渡り、吉田川の河畔を通り、北町にある八幡神社で大神楽を奉納すると、南町を



2-3-22 日吉神社境内 本殿



2-3-23 日吉神社 境内（拝殿）

2-3-24 日吉神社大神楽 役内訳

露払い	1	笛吹き	10	神楽堂荷役	4
幟り	4	鼓打ち	10	市兵衛	1
警護	2	舞子	3	おかめ	1
天狗	1	獅子廻し	6	鳥天狗	1
出花	1	大幣振り	1	床几持ち	4
榊持ち	1	付太鼓	1		

2-3-25 「日吉神社例祭大神楽奏楽道順」
(昭和34年)

衣装付	上日出早
試楽	日出早、下日出早、下日吉早、□形早、八軒早、新道、新開地、大正早、今小早、中横榊形早、下中日吉早、大阪早、上日吉早、稲荷早、中央通の櫻早へ、櫻早、神農薬師、柳早、中柳早、上柳早、洞（八坂神社、中坪中）、上殿早、職人早、鍛冶屋早、本早、肴早、殿早、正木早、中殿早
	日吉神社、山本早、乙姫早、川原早、愛宕早、若宮早、北朝日早、南朝日早、常盤町、左京早、立早、橋本早、新早、今早、榮早、新榮早

練り歩きながら日吉神社へ戻る。また、日吉神社を出て、大坂町【2-3-26】、今町、新町を通り、宮ヶ瀬橋を渡り、北町に入ると、岸劔神社で大神楽を奉納する。宮ヶ瀬橋を渡り、橋本町から願蓮寺前までくると、宮大門までは時間をかけて進む。大門から宮入りとなり、日吉神社で試楽の大神楽を打納め、午後9時30分に年行事（中央コミュニティーセンター）へ戻る。

本楽では、午前7時に年行事(中央コミュニティーセンター)から打出し、日吉神社で二芝居打つ。それから、榊形町、住吉町など南町の西側を成り歩き、城南町、大正町、栄町などを廻り、中央コミュニティーセンターへ戻る。午後になると、出立し、日吉神社で大神楽を奉納し、旧八幡町役場前で大神楽を奉納し、稲荷町、日吉町、大坂町、更には城南町まで廻り、火入宿（南部コミュニティーセンター）に向かう。午後7時30分に出立し、宮大門ではこすずめを演奏し、日吉神社に向かう。境内で本楽の大神楽を打納め【2-3-27、28】、午後9時30分に年行事（中央コミュニティーセンター）に戻る。

日吉神社大神楽は、南町の日吉神社と、愛宕神社、北町の八幡神社や岸劔神社、また合同奉納のため、旧八幡町役場庁舎前などの要所を廻りながら、南町の西は駅付近の城南町、東は東町までと、すみずみまで練り歩いている。この日吉神社大神楽が練り歩く北町も南町も近世城下町を起源としており、町家群が建ち並ぶ町並みを形成している。



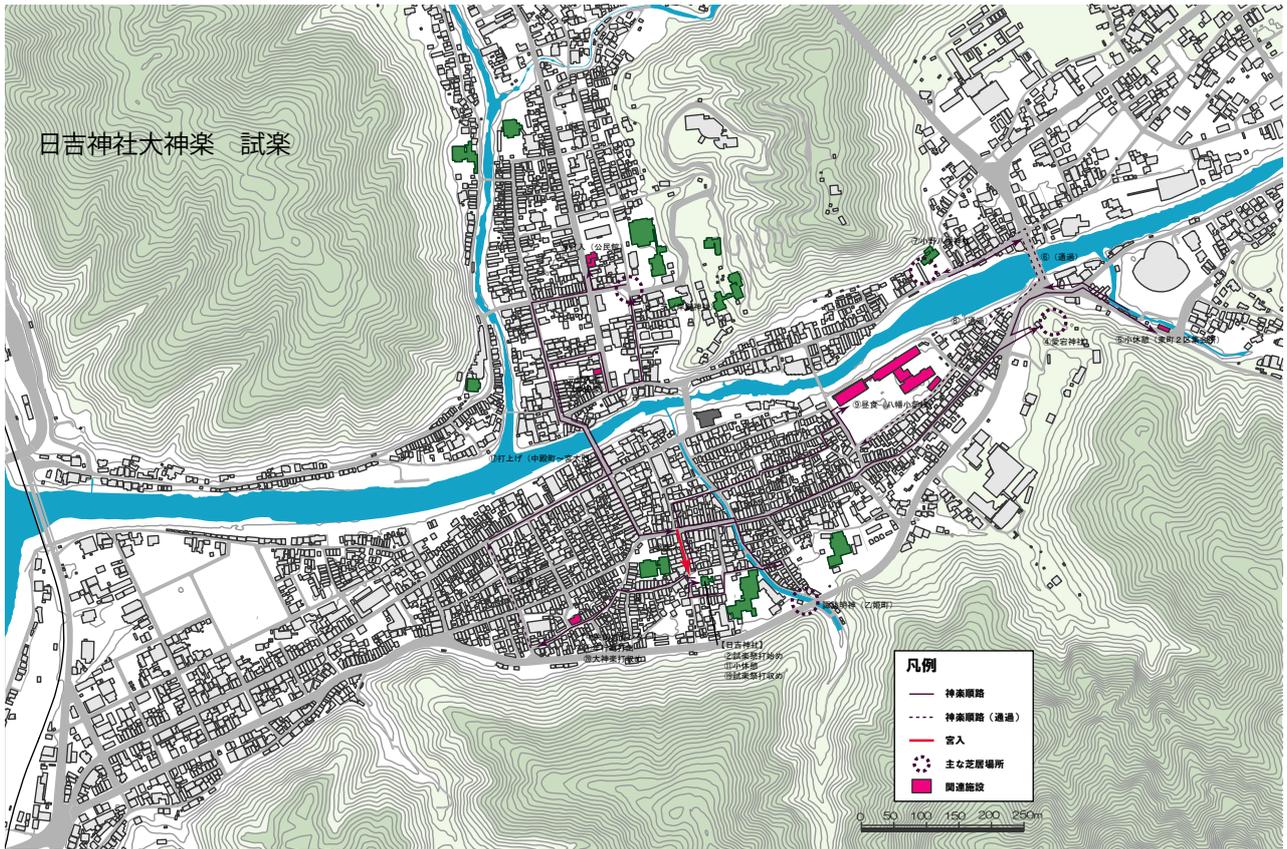
2-3-26 日吉神社大神楽



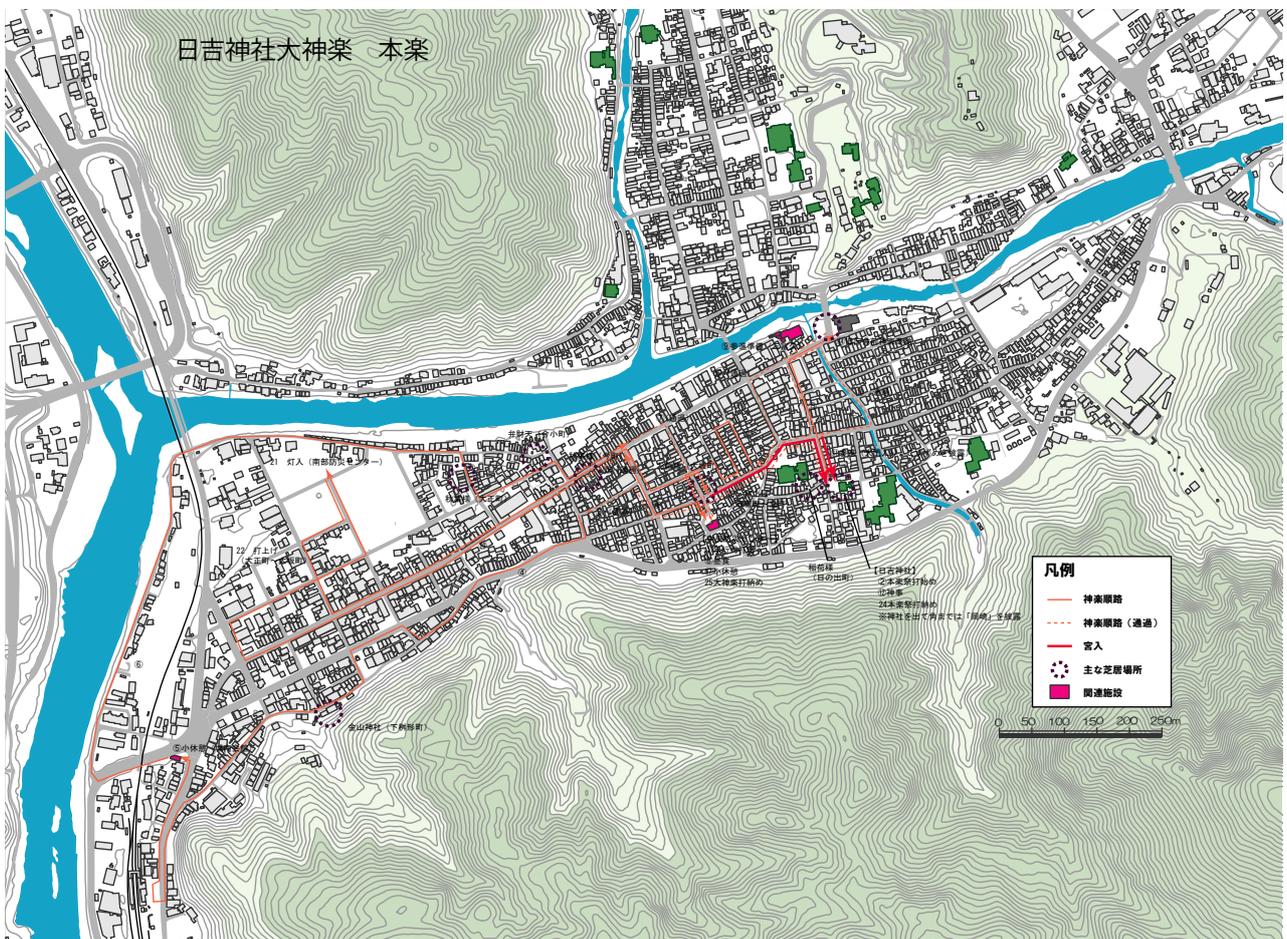
2-3-27 日吉神社大神楽 境内



2-3-28 日吉神社大神楽 拜殿前



2-3-29 日吉神社大神楽 試案順路



2-3-30 日吉神社大神楽 本案順路

(3) 小野八幡神社祭礼

八幡神社は、承久2年（1220）、藤原頼保が勅命で郡上に鷲退治に行き、途中で拾った鷲の羽根を岩間に差しておいたところ、村人が御神体として山頂に社をたて、羽根に「八幡」の字があったことから八幡宮と呼ぶようになったとされる。八幡神社は、永禄2年（1559）遠藤盛数が砦を築いた際、社殿を山上から桜町の東側にある現在の位置（小野字ヒツツリ）に移した。その後歴代城主の祈願所であった。明治6年郷社に指定され、同40年に同地の無格社天満神社と字西山の無格社神明神社を合祀し、同45年無格社若宮神社と字堂前水神神社と合併した。

八幡神社で行われる例祭の試楽、本楽の日程は、「年代記録抄」（長滝寺文書）によると9月24日に試楽、25日に本楽であったが、昭和30年に小野村が八幡町へ合併する際、春祭りに合わせて4月20～21日、現在は4月第3土日となっている。

境内には、鳥居の奥に文化3年（1806）の常夜灯が2基、八幡神社と天満神社の拝殿と、その奥に八幡神社本殿、天満神社の本殿、幣殿、神明系の鳥居などがある【2-3-31】。八幡神社本殿は拝殿奥の石積みの上部に位置し、覆屋で覆われている【2-3-32】。間口3間3寸、奥行2間3尺、流造で、本殿内にある棟札から、慶応2年（1866）の建築である。

小野八幡神社祭礼は、寛文7年（1667）8月、遠藤常友が長滝の禰宜神子を招いて奉納したのが始まりといわれている。嘉永元年（1848）8月の祭礼記録によると、「領主への上覧の節は正式行列を以て鞆腫御殿のある殿町を練歩し領主の御殿前にて神楽及奴踊を上覧に供する事」と領主は江戸在住期間が長くなり、在城期間が少ないので、「領主への上覧は五年あるいは七年に一度位」とある。

祭礼は、輪番制の打ち出し宿で大神楽と奴踊を打ち上げ、神社に向かう。神事が始まり、お祓い終了後、大神楽舞、奴踊が奉納される。道中の囃子の変化や宮入りの大神楽等は、伊勢神宮系の特徴を忠実に伝えている。奴踊は曲目も多種であり、他所ではみられない貴重な民俗芸能である。曲目は、道行、岡崎、宮入、縁上げ、本神楽、変わりで、同中の囃子の変化や宮入の大神楽は、伊勢神宮系の特徴を伝えている



2-3-31 八幡神社 境内



2-3-32 八幡神社 本殿



2-3-33 八幡神社 境内

る【2-3-33、34】。

小野八幡神社祭礼の役の内訳【2-3-35】にあるように合計は45名程度である。岸剣神社の大神楽と日吉神社大神楽と異なる点として、^{やっこ}奴がみられるのが特徴である。

試楽の順路【2-3-36】を見ると、小野の打出し宿で奴踊りと大神楽を打出し、山側の順路を進み、神明神社跡の麓で岡崎を披露し、八幡神社へ向かう。八幡神社からは川側の順路をとりながら小野の端まで廻る。

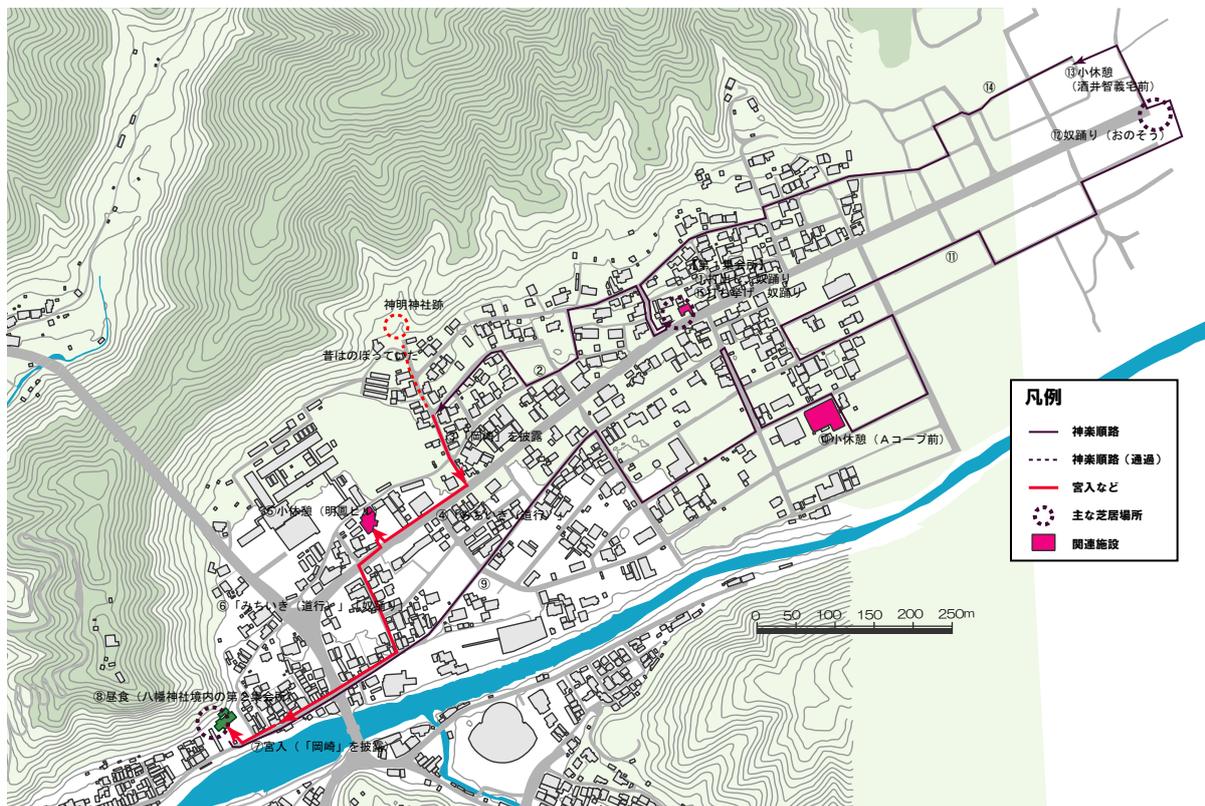
本楽では、小野の打出し宿を出立すると、まず八幡神社へ向かう【2-3-37】。八幡神社へ宮入りする際は、曲が変わり、奴は1列になって練る。八幡神社の正面で2列になり、奴は練りながらゆっくりと宮に入る。神事が行われ、大神楽を奉納し、奴踊りが始まる。八幡神社を出ると、桜町を通り、城下町プラザで大神楽と奴踊りを披露し、新橋を渡り、合同奉納の旧八幡町役場庁舎前に向かう。奴踊りを披露すると、新町、大坂町を通り、日吉神社へ向かい、日吉神社でも奴踊りを奉納する。立町、川原町、愛宕町を通り、愛宕神社でまた奴踊りを奉納すると、宿へ戻り打ち上げとなる。小野八幡神社祭礼は、北町は城下町プラザ、南町は大坂町以東、そして小野全体を廻り、大神楽と奴踊りが奉納されている。



2-3-34 八幡神社 境内

2-3-35 小野八幡神社祭礼 役内訳

警護 4	音頭 3	おかめ 1
東西呼ばり 1	地唄 4	天狗 1
神楽舞 3	鼓打 6	奴 9
小太鼓 1	獅子舞 3~5	
笛吹 6	ひょっこ 1	



2-3-36 小野八幡神社祭礼 試楽順路 (平成 22 年)

